



子育てチャンネル

子どもは機長、親は管制官になって

現在、小学校6年生の息子と4歳の娘の子育て中です。息子が2歳ごろから旭川空港に行つて飛行機をながめ始め、それがきっかけで絵本を出版することができきました。取材を重ねていく中で感じたのは、子供とのかかわりの中で、参考になることが多いということでした。

飛行機は常に安全を最優先とし、いろいろな人が関わり、協力して、初めて飛ぶことができます。

パイロットと管制官は、必ず2人1組になってお互いに確認しながら飛行機を飛ばしています。パイロットと管制官が話をしたいときは、お互いの顔が見えないので、誰に向かって誰が話すのかということ必ず言わなければなりません。子どもに話しかける時、目の前に顔が見えている時でも、名前を呼んであげるよりも注意して聞いてくれ

るように感じます。

航空システムは、コンピュータや最新技術を導入していますが、その原則は「安全はすべてに優先される」というほかに、「人間は必ず間違える。間違えない人間はいない」という考え方が前提になっています。パイロットが操縦で間違った操作をした場合、エラー表示が出ます。それでも続けると、もう一人のパイロットが「なぜそのような操作をするのか?」と確認していないか?と確認する仕組みです。

それでもおもしろい行動が続くと、地上からレーダーで見ている航空管制官が「あなたの飛行機は何かあったのですか?」と無線で確認します。

パイロットも管制官も常に訓練しています。通常ありえないぐらいの状況にも対応できるよう訓練を繰り返します。さらに操縦する

時も、何重にもミスを防ぐ仕組みが張り巡らされています。

子どもは毎日訓練をしている

日常の中で「何で毎日言っても同じことするの!」とよく子どもを叱ることがありませんか?

私たち大人が「ふつうに出来る」と考えて行動していることは、実は長い時間をかけて訓練してきたからこそできていることなのです。子どもたちは今、毎日違う条件に合わせて考えながら、行動すること、生きること、を少しずつ訓練しているのです。

「朝起きる時間が少し遅かった」「今日はお母さんに用事がある」「今日はお母さんの機嫌がちよつと悪い」など、少しずつ違う条件に合わせて対応の仕方を学んでいる真つ最中なのです。

「ミスをする」「間違えるのは当然」と思っていれば、子どもに対して少し違った見方ができるかも知れ

ません。そしてミスをした後に、どのように修正するかが、とても大事だと思います。

子どもが機長としたら、時にサポートをする副操縦士になり、時に必要な情報を伝える管制官のように見守れたら、と思います。

なぜ間違えたのか、と原因を考え、「手順は正しかったか?」「ミスを誘うシステムではなかったか?」と検証をし、同じミスがないように対策を考えます。

ほかの人にも注意して情報共有する、単純な思い違いや、覚えた知識を忘れてしまっていた時は、勉強方法のチェックをし、周りがフォローして、ミスが発端となつて起きるトラブルをなくすることが必要です。

同じ間違えをしないようにするために、一つの方法だけではなく、違う説明だったら分かるかな?といくつかの方法を用意して教えてあげられたらいいですね。

本エッセイ作家

千葉 章弘